

---

# 崎草学園行動部っ！

神奈司紗

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

崎草学園行動部っ！

### 【Nコード】

N2472Y

### 【作者名】

神奈司紗

### 【あらすじ】

先草学園という私立の進学校に入学して、現在中学二年生である  
呉澤慧斗。彼はいろいろあって行動部に入部することになってしま  
う。

部活、勉強、彼女……？

友達のいない彼は果たして学園生活を楽しむことができるのか！  
？

彼は何故その部に入部することにしたのか？

俺は走っていた。

何故なら、遅刻しそうだからである。

今日は4月3日。小3の頃から勉強に勉強を重ね（おかげで小4〜小6までの友達は無かった）、決して易しくはない先草学園の入試を突破し、首席で合格してから迎える二回目の春の最初の登校日。

つまり、入学式。

中一の時から先生や生徒に期待や羨望などの目を向けられていた俺は、主席の名に恥じない優等生、というわけではないが、それなりの評価を得ていたということを負っている。だが俺は、その評価が良ければ良いほどミスを犯した時のリスクが高いことを知っている。そのミスが、どんなに小さいものであっても、だ。

それを恐れて俺は今まで遅刻などしたことがなかった。学校には、所定の時間に登校しなければならない。それが、ルールだから。

それなのに、俺は入学式という大事な日に遅れてしまいそうなのである。

初体験なせいでどう対処していいのかわからない。

学年首席という立場である以上、学校で行う大きな大きなイベントとなると先生から数々のことが任される。入学式も、また然り。今回俺は、新一年生の案内役と中学2年生の代表を割り当てられていた。案内役はともかく、代表の言葉は俺しか原稿を持っていないため代役はアテにならない。

「代役が当てにならない」仕事をミスった場合、それは当然小さなミスにはなりえない。今日から俺に向けられる視線には非難と同情と憐憫、もしくはそれに類する感情に限られるだろう。

それは  
嫌だ。

突き刺さる高校生の目から逃れるように、俺は校門を走り抜けた。

ふと、学校の時計が視界に入ってくる。今、8時15分。入学式は8時30分。

間に合わない？まさか、間に合わせるさ。  
急いで中1の教室へと向かった。

「えー、ただいまより、崎草学園中等部、西暦2014年、第128回入学式を始めます」

講堂の中に、理事長の声が響く。校長が壇上上がるのを見ながら、俺は心底ほっとしていた。俺がもし今年から中1の教室が変わっていたことを思い出さなかったら100パーセント遅れていたよ……。俺がダッシュで中1の教室に向かったときには、もう既に中1が廊下に並んで待機していた。

中1、ナイス。

ところでこの学校は、多くのマンモス校がそうであるように入学式は中高別々だ。全校生徒が3000人を超える先草学園の全生徒は、当然全員が2000人収容の講堂に入るわけもない。とは言うものの、広いものは広いのだが。

このばかばかしい広さの所為で一列も相当長いし、一学年並べるのにも相当苦労するのだ。もう一生やりたくはない。

一応出席しているとはいえ中2、中3のやることは少ない。というか無いに等しい。だからだろどうでもいい事を考えるうちに入学式は終わりを告げた。中1から順にぞろぞろと教室に帰る。中1はこれから学校生活について話を聞かされるのだが、先生によってはどうでもいい事……。つまり自分の武勇伝を語り始めるのだ。そんな先生が担当になったらその年は諦めるしかない。そういう奴はまともに授業しない奴が殆どだからな。

心の中で静かに中1にエールを送る俺の隣には 誰もいない。  
なぜか？

わざわざ問うまでもない。友達と呼べる存在がないからだ。

俺に向けられてきた視線 期待、羨望……。そして嫉妬

と敬遠。皆が皆、俺には手も届かないと自分の中で決着をつけ、俺を遠ざける。自尊心・プライドが傷つかないようにするために。

こいつ・おれをなんとかして位置の座から引き摺り降ろしてやるうという気概を持った人物は、一人もいなかった。

今までに、一人も。これからも、きつと。

周りがそんな状況だったために　まあ元々俺は一人が好きだったからどっちから始まったかは定かではないが　お互いがお互いに近づけない。避けてしまおう。いつのまにか、嫌な悪循環が廻り始めていた。

クラスに戻ると既に大半がいて、それぞれ会話などに興じていた。俺はゆっくり絵と歩いて席へ戻る。確かまだあのミステリ小説読み終わってなかったよななどと思いながら椅子に座ると、ドサツ、と目の前に大量のプリントが置かれた。ぱつと上を見ると、隣席の女子がいた。ああ、これを配れと。

「大丈夫、やつとくから」

「へっ………あ、あ………お、お願いしますッ………」

別に敬語じゃなくても、という前に彼女はだつと駆け出して去っていった。

整理する風を装って聞き耳を立てていると、彼女やその友人の話し声が聞こえた。

「みなみちゃん　っ、怖かったよ　っ」「あー、はいはい」「

呉澤さんって確かにちよつと近づけない感じがありますよね……

・何か言われたのですか？」「グ、ぐすつ………だ、『大

丈夫、やつとくから』って言われたー」「あれ………？

思ったより怖くない？」「凜ちゃん、怖いつて、先入観じゃないんですか？」「まあ近寄りたいたい感じは確かにあるけどな」

いいよっしやあああああ

！！　誤解が少しだけ

解けたぞこれはっ………！！

ふふふ、と笑う。人目？　気にするものか。俺は今、誤解が解け

たんだああつ！

僅かに顔をにやけさせながら中2全クラスへプリントを配りに行く。

俺のクラスでは、彼女たちが俺を見て、なんか笑ってたよ、何考えてるか分かん無いな、やぱり怖いですねってか気持ち悪いです、なんて呟いていることにも気づかず。

そういえば、と俺は思い出す。

部活……なんにするべきか。まだ迷っているんだよな。

とはいえ、この時期に部活の選択に迷うのは、なんら珍しいことではない。というかそれが普通なのだ。

何故なら、まだこの学年では誰も部活に入っていないから。

崎草学園の部活制度は他校とは少し変わっている。他の数多の入学1、2ヶ月程度で多くの生徒が入部するが、この学校は体験しかさせない。覚えることの多い中1を部活で縛るのはよくないという考えを持っているからだ。

そして、これはまあたまにあることだが、この学校は全員部活に入らなくてはいけない。

こんな二つの校則がある所為で、俺はわざわざたくらすまで言うて個々人の名前が書かれたプリントを全員に配らなければならなくなったのだ。ふざけるな。俺が友達がいなかったことを後悔するのは大體においてこういうときだ。つまり、一人じゃ終わらない仕事するとき。俺の印象が酷いのは他クラスでも同じで、俺がプリントをせつせと配っていても全員が全員揃って無視。拳句俺のことをちらちらと見ながらひそひそ話。別に捕って食ったりしねーっの。

そんなわけで一人寂しくプリントを配り終え、クラスに戻る。

さて、部活だ部活、どうしようか。どこに入ろうがこれ以上周囲の目は変わらない気がするので部活によって差別とかは市内が、できれば上下関係が厳しいところがいい。先輩と仲良くなれるところだと、俺の孤独さが顕著になるからな。水泳部、バスケ部、剣道部や弓道部、硬式テニス部などの運動部がその筆頭だろう。そう思っ

て上下関係の厳しい運動部は一通り廻つたのだが、基本的にこの学校は勉強面以外ではそこまでルールに縛られない学校のため先輩後輩が仲のいい部活が多い。だから、俺の理想に合う部活が見つからないのだ。

「はあ……」

本日五度目くらいになるであろう溜息をつく。本当にもう、どうしてこう上手くいかねーんだろーな。

終礼を早く終わらせるためにやる気のない担任に挨拶させ、とぼとぼと廊下にする。

俺はどう映っているのだろう。

帰り道も、いつも一人。二宮金太郎のように本を読みながら猫背気味に歩く俺の図方を見て、何処かの誰かが嘲笑っているのではないかと。考えてしまうのだ。

怖いのか？ 俺は、怖がっているのか？

そうだな、俺は怖いのかも知れない。

いつも一人でいる癖に、人目はとても気になる。

たいした矛盾だな。

自嘲しながら校門を潜り抜け、行きに走った坂を下って行く。この学校は通学路が学年ごとに違う。つまり。俺が今歩いているこの坂には、中2しかないのだ。そして、中2にもなつて友達が一人もいない奴など俺くらいしかない。

要するに何が言いたいかというと、皆、友達と帰るのだ。

人は群れる動物だから。

……なんて、格好いい言葉で言っても無駄だな。

行動自体は滅茶苦茶格好わりーもんな、俺。

サンタでも何でもいいから、俺に友達をくれよ、と、本日6度目くらいになるであろう溜息をついた。

彼は何故その部に入部することにしたのか？ (後書き)

えー、色々間違えました。どうしてこうなった私。

彼は何故その部に入部することにしたのか？

「すーいーとっ」「ぐはあっ」

と、そのとき背後から超大声から呼ばれたかと思えば背中に直撃したドロップキック。背骨が折れたかと思った。てか、足跡つくだろ。

「なんだよ……千並」

雪長千並、小並兄弟。一卵性の双子で、見分ける箇所は故意に作らないと全くない。二人はいつも髪型で分けている。ショートが小並、肩まで結んだ髪を結んでいるのが千並だ。

俺に声をかけた奴は髪を結んでいた。つまり、千並。だが、

「残念、俺は小並。千並はこっち」

まさか、と思い、千並だといわれたほうを見る。髪は短かった。

「……おい」

「くくっ、今一瞬引っかかりやがりましたねっ、やりましたですっ、くくっ」

と、髪の短いほう……つまり小並が言う。

「くく、じゃねえよ……なんて低レベルな……楽しいかこんなことしてて……」

『いや、全く』

声をそろえて言うなよ。

「寧ろこっちが教えてほしいですよ慧斗。慧斗は何か楽しいこととかないのですか？ 僕と千並はなんかもう全てが楽しすぎてライフスタイルすら崩壊しそうな勢いなんです」

「しらねーよ」

「知つとけよ」

「いやいやいや義務みたいに言われても」

「義務ですが何か」

「義務なのかよ！」

まるで自分たちが世界の中心かのように。

「てーか、慧斗がいままでそれを知らなかったことに少なからずシヨックを受けているんだが」

「それこそ知ったことかよ！」

僅かに荒くなつた息を抑えると、俺は千並に言った。

「それはまあどうでもいい事として」

「どうでもよくないですよ慧斗！」

「どうでもいいんださっさと話をさせる馬鹿！ で！ それで！

えーと……あー、もうなんかなに言いたかったのかすら忘れちゃっ

たじゃん！ そう！ そう！ ……えーと、あ、思い出した、何の

用？」

「そのたつたら文字を忘れるくらい俺たちはお前に苦戦を強いていたというのか！？」

「え？ いや、まさかまさか、いくら慧斗でもそれはない」

「なんだ、その 疲れてんだからさっさとしてくれ」

「！？」

俺の一言で二人が息を飲む。え？ ごめん話聞いてなかった。な

に？ 何の話？ え？ 俺？

「俺にどーしろってんだよもー……まーいいから早く話せ。少なからず時間を無駄にしたじゃねーか」

「いやいや、てか、まーそんなたいした用でもないけど、部活、のことです」

「本当に大したことじゃねーな」

嘘だけだな。

「それで？ その部活がどうかしたか？」

「いやさ、実は俺ら『帰宅部』に入ろうと思っっているんだが、慧斗もどうかなって」

「は？ 帰宅部？ いや、崎草って部活絶対に入んなきゃいけないんじゃないかってっけ」

それとも俺の記憶違いだったか？ いや、もう入学して一年経つ。

流石にそれはないだろう　なら、帰宅部ってなんだ？

「違いますよ彗斗。崎草には実際帰宅部というものが存在するので。ただ帰るのでは当然ないですが。この学校の不思議なところ。部活申請したところは大体認められてしまう。勿論二年間の同好会の実績を経てからです。同好会から部活に昇格しなかったところは皆無だとか。あれ、知りませんか？　有名ですよ」

「いや、俺は運動部を中心にきてきたからな……」

「いや、それでも知ってる人は知ってると思うのですが……それにしても珍しいですね。彗斗なら選ぶのはきっと文化部かと思っただのですが」

「いや、だって俺友達いないし。なら上下関係厳しいところに入っただろがいいだろ。思ったようなところはいまだに見つかってねーかな。」

それを二人に伝えると、

「え……俺たち彗斗に友達認定されてなかったの……？　小学校からの腐れ縁だというのに？」

「腐れ縁と友達は違うだろ」

「いやでも腐れ縁の友達というのはよく聞きますし、そもそもこの会話を聞いていて僕たちが友達ではないといわれて納得する人など皆無だと思えますが」

「五月蠅い黙れそして死ぬ何回でも死ぬ」

「逃げたな」

「逃げましたね」

あーあー聞こえない聞こえない。何回も言ってるはずだが違うんだってば。なんと言うかちゃんと説明できないけど、俺が本当にほしいのは中学に入って、また一緒だねー、みたいな友達じゃなくて始めまして、な友達なんだよ。

「ごほん、まあとにかく、それで、どうかな彗斗。帰宅部に入ってみる気はない？」

「てか、何をするんだよ帰宅部」

「知らない」です」

「おい！」

何故ろくに調べないでつたし。

「いや、だつてさ。知らないものは知らないんだよ。ポスターもない、勧誘もしてない、なのに存在だけはしてる謎の部活」

「はあ……じゃあお前ら一体どこで知つたんだよ」

「その帰宅部かと思われる先輩に出会つたんだよ、彗斗。先生の手伝いで中三のいる三号棟にいったんだけどな、そしたら帰宅部、て声が聞こえて。その人に話しかけてみたら帰宅部の部員だつて。君は運がいいね、て言われてさー。それでそれでな、よく聞けよ彗斗、その先輩がすつげ　可愛いんだよ！良かつたら入つてねつてもうズツキュン！」

落ち着け。

それにしても、女、か。そんなに得意ではないんだが。あの人のことがあつたからな。だが、

「まあ、いだけなら」

と、了承した。

見学とかしたかつたら私に言つてね、つて言つてたからとりあえず三号棟行こうぜ、という千並に続いてその「先輩」の元へと向かう。

少しはしゃぎながら三号棟のドアをギイ、と開け、三階へと向かう。「先輩」のいる三年八組は三階だそうだ。

階段を上りきると、一人の少女がこちらへ歩いてきていた。童顔めのその少女。

千並が、あ、どうもこんにちは、という。

彼女は動かない。

俺も動けない。

その人は。

長いストレートの栗色の髪に薄水色のチェックのリボンをつけ、幼い顔に青い瞳を輝かせる、

その人は。

俺の初恋の相手。

初めて告白した人。

初めて裏切られた人。

女性が嫌いになった原因になった「あの人」。

彼は何故その部に入部することにしたのか？（後書き）

怒涛の急展開です。

それにしても慧斗くんは吃驚のポリシーを持ってますね。自分で書いててなんです。

幼馴染と友達は違う、ですか。まあ違う………といえは違うかもしれませんが……。

さて、今回はなんか先輩童顔少女が出てきました。

よく考えてみたら。

この人たちまだ中学生な訳で、初恋とか、マセてますね！。

……リア充が。

次が次くらいに慧斗くんは部活に入るのでしょうか。

たかが入部にどれだけ時間をかけているのでしょうか私は……

彼は何故その部に入部することにしたのか？

「あ……」

どちらも声が出せないでいる。

なんで。

なんでここに。

あんたは、

引越して、遠くに行つたんじゃないのか。

俺のことを裏切るまで裏切つて、

使い捨て玩具のように放り投げて、

どこかに消えていったんじゃないのか。

今更のように俺の前に現れて、

「あんたは一体、何を考えてるんだ」

「ごめんなさい、とその瞳から涙を流して謝る彼女の声も、聞こえない。

聞く気がない。

「なんだよ彗斗、知り合いだったのか？ 教えてくれればよかったのに」

千並が冗談めかした声で聞いてくるが、本当は知っているのだから。

俺と彼女との間に何か確執があることを。

千並だけでなく、小並もどこか心配そうな目で俺たちを見ている。一歩引いているのは俺の視線が余りに激しかったからだろうか。

「ごめんなさい　ごめんなさい、すいくん、ほんとに、ほんとに、

ごめん、なさい……！」

「先輩　あんた自分が何したか本当に分かって言ってるんですか。

先輩がしたことの結果は、今でもちゃんと残ってるんです。俺が周囲から、どんな目で見られてるか、わかってるでしょう」

「すい、くん」

「俺と小学校が一緒だったやつがこの学校にいる。それだけで周囲の俺に対する接し方はまるで割れ物だ。誰も接しようとしないうし俺だって関われなくなっている。それだって　その涙だって　嘘泣きなんでしょう」

「慧斗！　何があったのか知りませんが　流石に言いすぎですッ」  
「小並は先輩のことを知らないから　だからそんなことが言えるんだ」

俺達が先輩について口論をしていると、不意に先輩が声を上げた。「あつはは、やっぱりすいくんはすいくんだねえ。なんで引つかかってくれないかなあ。そうしたらあたしすいくんの有利になるように事を進めてあげたかもしれないのに」

その顔には、さつきまでであった深い悲しみの色など一塵も浮かんではいない。

その様子に、小並と千並は絶句する。

「先輩は……閑野先輩は、そういう人なんだよ。わかっただろ。閑野先輩は、俺の人生をぶっ壊した人なんだ」。

俺が断言すると小並は、認めてはいないものの、僅かに納得した様子を見せていた。

「とっころでさー、すうーいくんっ、帰宅部、入るの？　ねえ、入るのっ？」

そういいながら俺に思いっきり抱きついてくる。

「……………抱きついてこないで下さい、うっとうしい。それに俺はあんたがいる部活になんて入る気はない」

「くふっ、そう言わずにさーあ？　帰宅部楽しいよ？　一昨年同好会から部活に昇格して、知名度も上がったから部員数も増えたけど、同好会当時のアットーホームな空気もなくなっただけらしいしねー」  
「あ、えと、その、か、閑野……………先輩、ですか？　俺たち

は、その、入ろうと思ってるんですけど」

「うん？ うんうん、そうかあ。じゃあ入部届け出すときはすいくんも引き連れてきてねー」

「あ、は、はい……」

「とりあえずこれから部活あるけど……あ、帰宅部は基本毎日あるからね。んっでー、何だっけ？ 見学だっけ？ んー、あたしのほうから言っというてなんだけど思っけど、あんまり見学の意味ないと思うんだよねー……基本駄弁ってるだけだから。あ、でもいろいろ活動することもあるよ？」

「そ、そうなんですか……？ た、例えば？」

「地域の祭りで歌ったりとか、お菓子食べたり、ライブやったりとか、かな？ コレが結構うけがよくてね？ いやー面白いんだよねー」

「そうなんですかー」

小並は平然と返している。俺は話を聞くのも嫌になって踵を返した。

「えー、すいくん帰っちゃうの？ こなみん、ちなみん、今度は引き摺ってでも連れてきてね？」

「は、はいっ」

ウインクをされ小並は顔を赤くする。ていうかこなみん、ちなみんってなんだ。

俺はもう付き合いきれなくなり、階段を下りて二号棟から出た。

彼は何故その部に入部することにしたのか？ （後書き）

うーん……案の定今回はまだ慧斗は部活に入ることができなままです……今回で入れてもいいかなと思ったんですけど、まあもう少し時間を置いて。今回は正直どうでもいいことを長々と書きました……

慧斗の先輩に対する嫌悪がかければそれでいいかなーと。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2472y/>

---

崎草学園行動部っ！

2012年1月6日13時52分発行